

# 遠藤周作とキリスト教文学（その1）

ENDO Shusaku and Christian literature (Number 1)

二平 京子

## 要約

遠藤周作はキリスト教徒としての自らの立場を明確にして文筆活動を開始した作家である。本稿では、その遠藤自身のキリスト教文学観について考察し、作品化の跡をたどった。遠藤のこの挑戦の根底には、「魂の凝視」を自らの使命と自覚する作家の、鋭くも温かい眼差しがある。それは、人間存在の内奥にある「魂の領域」に射し込む一条の光を凝視するまなざしであり、弱く小さく、罪にまみれる人間存在の救済への可能性を確信する証し人のそれである。『死海のほとり』『深い河』へと展開する一連の作品群を生み出す鍵ともなる、遠藤の視座の変容と深化の跡とを確認した。

## はじめに

遠藤周作の文学活動は多岐に亘る。学生時代から評論を手掛け、フランス留学を経て、作家活動に自らの使命を確信して後、世に出された作品のジャンルは実に多様である。大きく纏めれば、芥川賞作品『白い人』、『沈黙』、『死海のほとり』等から『深い河』に至る、いわゆる純文学作品。一方、軽小説といわれる「おバカさん」「わたしが・棄てた・女」「どっこいしょ」等の作品群も多くの読者を得ている。ところで、その「おバカさん」の解説に（角川文庫）において、江藤淳は『海と毒薬』は、日本人と神という一般的な問題について書かれた小説である。しかし、『おバカさん』は日本人であり同時にカトリックの信者でもある遠藤さんという人の神を求める素直な心がそのままに生きている小説である。一方は頭で書かれているが、もう一方は心で書かれている」と評し、遠藤自身もエッセー「秋の日記」で「私は

『おバカさん』という作品で、ベルナノスの『田舎司祭の日記』やモウリヤックの『仔羊』に描かれている主人公をもっと一般的な形で書こうとした」と記している。ベルナノスも、ノーベル賞作家モウリヤックにおいては特に、遠藤に絶大な影響を与えたカトリック作家である。となれば、両者には、趣こそ大きく異なるものの、それぞれの表出を促す共通母胎のようなものが在ったと考えられる。それは、何であったか。私は今、これをキリスト教或は、カトリック文学に求め、考察してみたい。その上で、それが初期の作品にどう反映しているのか検証したいと思う。

## 一 遠藤周作のキリスト教文学観

遠藤周作と聞けば、「キリスト教作家」或は、「カトリック作家遠藤周作」と、反射的にその肩書きが加わって私の頭に浮かぶ。

しかし、改めて考えてみれば、キリスト教文学とは何か。これまでの日本の文学史を通観する時、芥川らの優れたキリシタンものを認めるものの、また、堀辰雄、太宰治のように、キリスト教に深い関心を示し、文壇に多くの影響を与えた文学者の存在を評価するも、キリスト教文学なるジャンルを見つけ出すことはできない。

しかるに、椎名麟三、佐古純一郎、遠藤周作を戦後におけるキリスト教文学のパイオニアとするこの新たな流れは、非常に多くのキリスト者作家・批評家を文壇に輩出し（注1）、めざましい活躍をもって地歩を固めたと言えよう。

では、そうした新しい動きの中で、遠藤自身は、このキリスト教文学なるものをもどどのようにとらえていたのか。

## 1 魂の凝視

遠藤は、初期のエッセイ、「異邦人の苦悩」において次のように簡潔明瞭な見解を示している。

（前略）極端ないい方をすると、キリスト教文学などは、文学の場合存在せず、文学だけがあり、たまたまその書き手が洗礼を受けたキリスト者であるというような作家でありたいと考えてきた。

これはどこか、はぐらかされた感のする返答である。しかし、キリスト教文学なるものが、護教文学、つまり、キリスト教の教義を擁護するために書かれた作品とは、一線を画すべき点などを考え合わす時、遠藤のこの発言こそもつともだと考えられよう。なぜなら、「書き手が洗礼を受けたキリスト者である」という点にこそ、実質的な意義が含まれていると考えるからである。つまり、その作家の「視座」こそが、結局は、作品を決定付けるのである。

では、遠藤におけるカトリック者としての視座とは如何なるものか。遠藤二十四歳の評論「カトリック作家の問題」には、カトリック文学について、次のような説明が加えられている。

人間は神を選ぶか捨てるかの自由を持っている存在である。この人間の自由を文学に賭けるのがカトリック文学です。つまり、カトリック文学も、他の文学と同じように、人間を凝視することを第一目的とするのです。それを歪めるこ

とは絶対に許されない。極言を弄するならばカトリック文学は、神や天使を描くのではなく、人間を、人間のみを探究すればそれでいい。カトリック作家は決して聖人や詩人ではない。聖人や詩人の目的は、ひたすら神をあがめ頌め歌うことである。けれども、カトリック作家は、作家である以上、何よりも人間を凝視するのが義務であり、この人間凝視の義務を放棄することは許されない。

遠藤が、このように人間凝視としての文学を主張する時、それは常識的で新味のないものと言わざるを得ない。しかし、問題はその人間凝視を行う者の立場にある。例えば、自然主義の立場にある者には、自然的生という一元的な意味での人間凝視が可能である。しかし、作家であると同時にキリスト者である人間にとって、それは必ずしも容易なことではない。

亀井勝一郎は、宗教と文学とは矛盾するもの、二律背反たと言い、遠藤は「異邦人の苦悩」にフランソワ・モーリヤックの言葉を引いている。

キリスト者であり、作家であるということは、一本の綱を渡るようなものである。右足に力を入れると右に転び、左足に力を入れると左に転落してしまう。遠藤自身の言葉で言えば、

作家である限り、人間の内面——たとえ、それがどんなに汚らしく、どんなに汚れた罪の部分であっても直視しなければならぬ。あるいは、その中に指を入れなくてはならない。しかし、キリスト者である限り、そういう汚れた部分は避けなければならないから汚れた部分を直視することはできない。

と云うことであろう。「もし、右の目があなたを躓かせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。もし、右の手があなたを躓かせるなら、切つて、捨ててしまいなさい。」（マタイ五章二九・三十節）とのキリストの言葉が、作家の脳裏から離れなかつたであろうことは、私などの想像にも難くはないのである。

このような苦悩を伴う、カトリック者による人間凝視の意義はどこにあるのか。佐古純一郎は『宗教と文学』において、「真に徹底的な人間凝視は、宗教者にしてはじめて可能なものではなからうか」と述べている。

遠藤も、現代文学への批評をおして、真の人間凝視について語っているように思われる。

日本の文学に欠けているものは、人間内部の心理の部分だけを考えて、心理小説を書くか、あるいは、その心理分析に飽き足らないで無意識の世界を書くかの限界に止まっている点である。（中略）しかし、一度キリスト教を知った作家にとつては、そういう心理や、心理の背後にある無意識の領域の、更にその背後に魂の領域があつて、その魂の領域に肉薄しなければ、人間の内部をすべて描けないという気がする。

もちろん、私の小説が、魂の部分を描り下げていると言っているのではない。しかし、私が小説家である限り、またキリスト者である限り、私が日本の心理小説や、あるいは無意識を書いた小説に飽き足らないのは、キリスト教が魂とすることを私に教えてくれたからである。（注2）

要約すれば、「魂」の領域に指を触れなければ、真の人間凝視はできないのであつて、その「魂」の領域を遠藤に教えたのがキリスト教に他ならない。ゆえに、逆から言えば、魂の凝視こそがキリスト者による文学の使命なのである。「魂」の世界を見つめ、その姿を描き抜く事、これがキリスト教作家遠藤周作が自らに課した、生涯に渡る使命であつた。

次に、遠藤の言う、この「魂の凝視」なるものについて考えてみたい。その際、魂の凝視が形而上的な視点をもって初めて可能であることは、改めて記すまでもない。

例えば、戦後の文壇において、思想や理想をめぐる葛藤を描いた作品は多く、転向や挫折を扱った作品もあまたある。作家の多くは、虚無、絶望、信頼関係の喪失、相互理解の不毛性といった状況を捉えて描くことによつて、現実の一面を拡大し、そこにひしめく人間をより鮮やかに描こうとする。しかし、その描写に見られる作家の眼は、単に、その現象の記述に留まっていはすまいか。

これに対し、遠藤が人間の真実を問題とする時、その段階に留まることをしない。

## 2 永遠の余白

「カトリック作家の問題」で、遠藤はモーリヤックの次の言葉を引用している。

作家は罪によつて人間性をあらわにすべきなのであるが、この奥底に潜む悪

の彼方に基督者が確信する事があります。それは、今一つ別の光が、作家の不安な眼差しの前でこの罪を浄化し、聖化するということです。

ここに、遠藤やモーリヤックのいう、「人間の真実」あるいは、「魂の凝視」を考える鍵が含まれている。無論、「神の模倣者（サンジユ）ではあるが、猿（サンジユ）であつて、神ではない」（注3）作家が、作中人物の救いの可否について語ることはできない。しかし、いかに罪に汚れ、悪に染め抜かれた魂であっても、やがて全能者の手によつてその罪が浄化され、聖化していくであろう魂の描写こそが、「人間の真実」を語ることであり、「魂を凝視」することではなからうか。ダニエル・ロップスのいう「魂のなかには一つの秘密があつて、そこに救いがくる」（注4）という、そのスペースを確保し、モーリヤックの示した「堕ちていく魂のさすらいを鎮める」あの「永遠の余白の世界」を作品にとどめることは、宗教によつて光を与えられた文学にのみ可能とならう。

カトリック作家、遠藤周作が、自らに課した事柄、それは、聖書を読むことによつて知った、「魂の領域に指を触れ、」それによつて「人間の内部」を描く事であつた。

## 二 カトリック作家遠藤周作の歩み

### 1 評論から小説へ

先において明らかにされた、遠藤のキリスト教文学観に基づいて、ここでは彼の作家としての歩みを、大まかに辿つてみたい。

昭和二十五年のフランス留学以前から評論を手掛け、一部にその名を知られていた遠藤が、研究の道ではなく小説家として歩む事を決意した動機については、エッセイ「異邦人の苦悶」からも知ることができる。長い引用ではあるが、

キリスト教の文学を勉強すればするほど、私は彼らと自分との間の距離感というものを却つて深めていったのである。（中略）こつた距離感、大学を出て、

戦後、初の留学生としてフランスに渡ったときさらに強められた。（中略）私には自分の勉強がいつまでたつても、大きな壁にぶつかるような気がして、研究

室に入る気持ち、次第に放棄していった。

その時から私は、自分が小説家になろうと考えたのです。つまり、私にとって生涯やらなければならない自分だけのテーマができたような気がしたからです。

そのテーマとは、私にとつて距離感のあるキリスト教を、どうしたら身近なものにできるかということであり、いいかえれば、それは母親が私に着せてくれた洋服を、もう一度、私の手によって仕立てなおし、日本人である私の体にあつた和服に変える、というテーマであつた。

エッセイのこの部分から、遠藤が、いかに確固たる問題意識をもつて、その将来を決定したかが良くわかる。

「母親が私に着せてくれた洋服」とは、遠藤がよく口にした比喻で、洗礼（幼児洗礼）を意味する。彼の洗礼は、昭和八年、遠藤十歳のことで、当時を振り返り、「受けた」というより『受けさせられた』と言つたほうがいい。（中略）それはまるで『このお菓子を食べますか』『はい、食べます』という外国語会話の問答に似た行為だつた。私は自分がどんな大きな決定をその時、やつたのか知らなかつた。この一言の返事が後々、自分にどういふものを背負わせることになるのかもほとんど考えなかつた。」と『石の声』に記している。考えてみれば、小説家遠藤の運命は、この「はい」と答えたその時、既に決定されていたのかも知れない。今は亡き椎名麟三や佐古純一郎のように、思想的到達点として選んだのではないキリスト教は、成長と共に遠藤を悩ませたであろうが、遠藤のいう「私だけの文学」は、ここにこそ源を發しているのである。

ところで、遠藤をして作家活動に向かわしめた直接のきっかけ、即ち、留学中に身をもつて知らされた「大きな壁」とは、何か。それは勿論、遠藤がカトリックであることと無縁ではあるまい。私はここで、『爾も、また』の向坂の言葉を思い出す。

外形は、ほとんど同じでも、それを創りだしたものの血液は、同じ型の血ではなかつた。このくるしい事実には二年間毎日毎日生活したのです。なんだ、それだけのことかと人は言うでしょう。しかし、本で読むことと、それを生きることとは別です。私はともかく、留学中それだけのことに生きたんです。我々は別の血液型の人から血はもらえない。私はそんなつまらないことを、あの巴

里の寒い冬の夜、一人ぼっちで考えていたんです。

本当に理解し、摂取するということは、単に本を読んだり、考えることではない。

それを生きることである。「大きな壁」、それは相和することのないヨーロッパと日本「血」であつた。この抽象的な「血」を、遠藤の意識に即して、もう少し具体的にいうなら、それは、ヨーロッパの「神的血液」と、日本人の「汎神的血液」との対立という問題になるはずである。「大きな壁」に対する敗北、違和こそが、キリスト教徒として、日本人として、そして、小説家としての遠藤を発奮させたのである。

当然、帰国後の遠藤の課題は、その距離の短縮に充てられる。しかし、それも考えてみれば、昭和二十二年に書かれた処女評論「神々と神と」に既に見られる次の事柄の具現に他ならなかつたわけである。

カトリック文学を読む時、一番大切な事の一つは、これら異質の作品が、ぼく等に当然あたえてくる「距離感」を決して敬遠しない事、寧ろ、逆に、それを意識し、それに抵抗する事からはじめるべきだ。

こうした意識をもつて、小説家として立った遠藤のその後の歩みを概観する時、それが、いかに誠実かつ着実に進められてきたかに、私は改めて驚かされ、感心させられるのである。

ただ、忘れてならないのは、遠藤が、キリスト教（西洋）との距離を縮めようとする時、そこには、一つの独自性が見出されるという事である。それは、先の引用に既に明らかである。つまり、合わない「洋服」を「私の手によって仕立て直し」「日本人である私の体に合った和服に変える」ということである。はつきり言うなら、遠藤が距離を縮めるといふ時、それは、自らを変革するのではなく、あくまで対象（キリスト教）を、自分に合わせていく事を意味する。『沈黙』に見られるイエス理解は、まさに、その表れであつたろう。

ではここで、実際に作品に即して、小説家遠藤周作の足取りを辿ってみよう。ただし、本稿ではその範囲を『死海のほとり』以前と定めたい。

## 2 視座の姿容

遠藤のキリスト教作家としての歩みには、その視点の変化から、幾つかの転換期が指摘されているが、私はそれを『海と毒薬』執筆後の昭和三十六年、三回に渡る肺手術を余儀なくされた病床体験に求めてみたい。(注5)ただしそれは、文学的転換というよりは、死を直視し、神と正面から向き合った信仰者の人間としての変革、つまり視点の全き変化と言わなければならない。以後は、この観点からの考察である。

さて、病床につく以前の作品といえは、「白い人」「黄色い人」「海と毒薬」の三編が代表作として挙げられる。これら一連の作品が、罪と悪の意識の問題を扱っている事は、一目瞭然である。「白い人」では、ジャックに象徴される「白い世界」の論理と、「私」の「悪魔の世界」の論理との対立がその主題であり、その両者からはみ出して生きる存在として、「黄色い人」が微かに浮かび、また、「黄色い人」と「海と毒薬」は、神を持たない日本人の精神的な悲惨、醜悪を描いたものと言ってよからう。なるほど武田友壽の言う『運命の連帯感』という新しい視座を『海と毒薬』に見ることも不可能ではない。しかし、それはあくまで可能性であって、その主題はやはり、「罪の意識」の不在を鮮明に訴える事にあると見るべきであろう。また、「黙示録」からその名をかりた「黄色い人」では、「東洋人には神はない。何故なら彼らは自我を主張しないから」というモーリヤックの言葉を絶対視し、それによって黄色い人の民族的な性格を決定しているかに見える。黄色い人は「疲労」、「無気力」、「無感動」の人、というように。

しかし、こうした一方的な指摘には大きな疑問が残る。つまり、「罪の意識がない」「死に対して無感覚である」「神を持たない」と言う事自体に、どれほどの意味があるのかという事である。遠藤も、この点については意識しており、次のように記している。

私は、「白い人」「黄色い人」やそのあとつづいて『海と毒薬』にもつづら、日本人とキリスト教との距離を書きつづけてきたけれども、それ以後、ふたたび大きな病気にかかり、三年間入院しなければならぬという経験の間に、この距離をすこしずつ自分の内面でうずめはじめた。

私は、ここに「もつづら」距離を書きつづけた遠藤の、自分に対する不満の声を

聞くような気がする。

こうした時期に、三年余に渡る入院生活が一つの転機を形成するのである。この間の事は、『満ち潮の時刻』や『哀歌』に収められているが、三回目の大手術では手術死の覚悟をもって臨む必要があったという。

「男と九官鳥」「四十歳の男」など十二編を含む『哀歌』から、三十八年に『群像』に発表された「私のもの」を取り上げ、当時を振り返ってみたい。

「君なんか…俺…本気で選んだんじゃないんだ」

幾度もそう罵った「あの男」の疲れきった顔を見つめる。

うどん屋で妻が勝呂の心の裏を知らず嫁いできたように「この男」も冬の朝、夙川の教会でカラスが愛してもせず口に出した公教要理の形式的な誓いを本気にして（中略）みにくい顔をしてこの三十数年の間、彼の同伴者になってきた。

彼が「この男」を本気で選んだのではないんだと罵る時、その犬のように哀しそうな眼はじつと彼を見つめ、泪がその頬にゆつくりとながれる。それが「あの男」の顔だ。宗教画家たちが描いた「あの男」の立派な顔ではなく、勝呂だけが知っている、勝呂だけの「あの男」の顔だ。私は妻を棄てないように、あなたも棄てないだろう。私は妻をいじめたようにあなたをいじめてきた。今後も妻をいじめたようにあなたをいじめぬと言う自信は全くない。しかし、あなたを一生棄てはせん。

ここからは、勝呂ならぬ、遠藤自身の信仰告白の声が響いて来るように感じられる。愛からではなく選んだ妻の背後に、紛れもない「あの男」の顔が浮かぶ。この「犬のような哀しそうな眼」をした「同伴者」また、「神などという実感のない曖昧な言葉でよべない」「あの男」は、遠藤が生い立ち、流浪し、そして死に瀕した今、歴然とその姿を現すのである。「あなたを一生棄てはせん。」それは逆に、「あの男」から遠藤に向けられた宣言に他なるまい。

この貴重な体験を経て、キリスト教と自己との距離を、その内部で埋めつつあった遠藤に、決定的な語りかけをしたのが、一枚の小さな踏絵であった。その邂逅を、遠藤は『沈黙』のあとがきで次のように記している。

数年前、長崎で見た摩滅した一つ踏絵—そこには黒い足指の

痕も残っていたが、ながい間、心から離れず、それを踏んだ者の姿が入院中、私のなかで生きはじめた

佐藤泰正も指摘しているように、遠藤の中で生きはじめたのが、「一つの踏絵」ではなく、そこに「黒い足指の痕」を残しながら、それを「踏んだ者の姿」であったとは、心惹かれる重要な点であろう。「帰郷」「札の辻」「雲仙」などのデッサンの作品を経過して、遠藤は、人が人として在るための存在そのものの重さ、悲しさに、真正面から取り組もうとしたのである。

これを、病床以前の作品と比べるなら、「死に対する感覚・罪に対する感覚」そして、何よりも「神に対する感覚」がないと、「ないない尽くし」の世界を、汎神論云々で片付けてしまうのでなく、「カトリシズムを知らば知るほど僕たちは、神々の子としての血液がざわめき叫ぶのを聴く」と記した処女論評「神々と神と」に立ち帰り、そのざわめきの根にまでくだらうとする遠藤の姿をそこに見るのである。そうすることによって初めて、「黒い足指の痕」とおして、その背後に生きはじめた新しい神を語ることができるのである。

ここで、新しい神を造形する前に、遠藤の踏んだ歩みの理論と、その作品化とを融合させ、簡単に振り返ってみたい。

まず遠藤は、留学中に突き当たった「大きな壁」で、キリスト教と自分との間にある距離を自認し、その距離を縮めるための道を、評者から人間の問題を追究し得る小説家への転向に求めた。それによって、「大きな距離」に挑もうとしたのである。こうして始まった小説家としてのプロセスには、前述したとおり、長い病床体験を契機とする一つの飛躍を認める事ができる。つまり、初期の作品に見られる罪意識不在の現象面を単に暴露し、汎神論云々で観念論的に批評しようとする立場から、病後の作品に見られる「踏んだ者」の魂の内奥を凝視しようとする立場への脱出である。ここに、人間性の弱さに苦悩しながらも、抜け出し得ない人間の姿を共感をもって描き出すことを使命とした遠藤の確固たる決意が認められるのではなからうか。

そこで、このような変革を遠藤に促した内的原因が問題となる。武田友壽は『遠藤周作の世界』で、遠藤の病床体験に次のような意義を認めている。

その長い孤独の生活が氏の内面にひとつの成熟をもたらしたのだ、と思う。その成熟とは何よりも氏の〈神〉をめぐる体験の深化に他ならないのである。

「神」をめぐる体験の深化」とは、罪の意識の不在がより自省的になり、自らの罪の許しと魂の救済を願わずにはいられない自己認識と、その願望の深化を意味するに違いない。ここに、批判するばかりでなく、救済、つまり、モーリヤックの言う「永遠の余白」を求める遠藤の裸の魂を見る事ができる。しかし、罪意識不在のゆえに、神の要求と自分の応答との間に大きな隔たりを覚え、罪のうちにも救いを与える愛の神を求める時、一神教のアピールする神に救済どころか、遠い距離を感じざるを得なかったことは、遠藤にとって最大の問題であった。

### 3 母なる神

そこで、その距離を縮めようとして、『死海のほとり』のテーマである、「俺のイエス」を追求したことは、当然考えられる事である。かくして、遠藤の中に新しい神のイメージ、日本人にとって距離感のない、また、遠藤にとって、「着なれた和服」となる神のイメージが明らかなる像を結ぶ事となる。

では、その新しい神のイメージとは何か。遠藤は「私のもの」で、「一生棄てはしない」という信仰の声を聴き、さらに『沈黙』においては、「踏絵を踏む司祭に対し、「踏むがいい。お前の足の痛さはこの私が一番良く知っている。」と語る神をイメージアップしている。結論を急げば、新しい神とは、『沈黙』以降に見られる「母なるもの」（母の宗教）を強調した、赦す神、慰める神、愛する神である。遠藤は、「正宗白鳥氏が洗礼を受けたあと、そのキリスト教から次第に遠ざかっていったのも、父の宗教に対する彼の不安、あるいは距離感というものがかくれていたのではないか」という、日本キリスト教史の大問題を前提に、

私は、『沈黙』を書くことによって、キリスト教との距離感の一端をうずめたような気がした。つまり、それは、父の宗教から母の宗教への転換ということであり、私の主人公が心の中でもっていた父の宗教のキリストが、母の宗教のキリストに変わっていくというテーマである。

と『異邦人の苦悩』に記している。

そもそも、救済を求める遠藤の魂が、弱さゆえに罪を犯す人間をあわれみをもつて、赦し慰める母なる神を求めたのは、当然ではなかったか。心の中に、力強い威厳あるイエスの面差しを抱いてやって来た外人神父セバスチャン・ロドリゴが踏絵を前に見たキリストの顔は、くたびれ果てた、そして我々人間と同じように苦しんでいるそれであった。ちようど、できの悪い子供にも赦しを与え、それを共に苦しむ母親の顔であった。

そう遠藤が言い切る時、当然多くの問題が生まれてくる。しかし、「ないないづくしには、もう耐えられない。たとい間違っついても何とか踏み石を置いて」（注6）渡って行きたいと言ひ、そのイメージを母なる独自のキリスト像にまで熟させ、それによつて初めて、「日本人のなかに入つてゆ」けたと遠藤自ら語る時、それは高く評価されてしかるべきであろう。

踏絵に母なるイエスを発見した遠藤の文学は、彼自身も認めているように（注7）、これによつて文学的出発以来の第一期の円環を閉じたといえよう。

当然、『沈黙』以後の作品には、この第一期を越えるものが求められる。遠藤はそれを次のように述べている。

『沈黙』を書いたあと、私が次に自分に課したテーマは、それでは日本人の信じられるような、また日本人の実感でわかるイエスというのはどういうものかということであった。

この、実際的な試みが、『死海のほとり』であり、『イエスの生涯』であったことは言うまでもない。そこで、遠藤は「自分に合う和服」としての「俺のイエス」のイメージを、より確固たるものとして描き出し、そのイエスの復活による自らの救済を、「永遠の余白」として提示しようとしたのである。

さて、遠藤の歩みをこのように辿り、私が次に為すべきは、この試みの成果を『死海のほとり』において検証することである。しかし、先に記したとおり、この度はこれを留保し、続く機会にキリスト教文学としての視点から、この作品に焦点を当ててみたい。

ともあれ、遠藤のこうした着実な文学的足取りは、キリスト者であり作家である遠藤の、イエスを求め続ける誠実かつ正直な生き方の証に他ならなかったことを記

し、この考察をひとまず結びたい。

#### 注

- 1 島尾敏雄・坂田寛夫・三浦朱門・矢代静一・小川国男・森内俊雄・井上ひさし・田中澄江・阿部光子・有吉佐和子・曾野綾子／佐古純一郎・佐藤泰正・上総英郎・武田友壽等を挙げることができる
- 2 遠藤周作『異邦人の苦悩』
- 3 遠藤周作『カトリック作家の問題』
- 4 注3に同じ
- 5 高橋たか子は、結核再発の闘病生活を文学的転換の契機として捉え、武田友壽はその無意味さを主張している。本稿では、作家の意識を越えた宗教体験が作品に与える影響という視点から前者の立場を取った。尚、遠藤には三回の重要な病床体験があるが、これらについては、山根道公著『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』に詳しい
- 6 佐藤泰正『文学その内なる神』—近代文学その一面—
- 7 遠藤周作／佐藤泰正『人生の同伴者』

#### 参考文献

- 佐藤泰正編『遠藤周作を読む』笠間書店（二〇〇四年）
- 遠藤周作／佐藤泰正『人生の同伴者』講談社（二〇〇六年）
- 遠藤周作『日本人はキリスト教を信じられるか…対談集』講談社（一九七七年）
- 遠藤周作『沈黙の声』プレジデント社（一九九二年）
- 山根道公『その人生と『沈黙』の真実』朝文社（二〇〇五年）
- 上総英郎『遠藤周作論』春秋社（一九八七年）
- 上総英郎『十字架を背負ったピエロ…狐狸庵先生と遠藤周作』朝文社（一九九〇年）
- 井上洋治『イエスのまなざし…日本人とキリスト教』日本基督教団出版局（一九八一年）
- 井上洋治（編）『日本カトリシズムと文学』大明堂（一九八二年）
- 笠井秋生『遠藤周作論』双文社（一九八七年）
- 武田友壽『沈黙』以後…遠藤周作の世界』女子パウロ会（一九八五年）
- 江藤淳ほか『遠藤周作』小学館（一九九二年）

